

大学生の親性の準備に関する研究

—ふれあい体験とアタッチメントスタイルからみた子ども観—

木村 留美子¹⁾ 津田 朗子¹⁾ 木村 礼¹⁾ 奥水 めぐみ²⁾
中出 清香²⁾ 竹俣 由美子²⁾ 棚町 祐子²⁾

The research of the preparation for parenting of university students
— the attitude for children from the students' experience of contact with children
and students' attachment style —

Rumiko KIMURA, Akiko TSUDA, Aya KIMURA,
Megumi KOSHIMIZU, Sayaka NAKADE,
Yumiko TAKEMATA, Yuko TANAMACHI

Summary

This research aimed at 81 young adult of university students. It was analyzed that the reports which were written about the students' experience of contact with children, and attachment styles of them. They had an experience which was contact with nursery school children of 4 and 5 years old. It purposed to prepare for parenting as learning in assurance of child development in young adults. It was analyzed that the particulars of that they understood children deeply through it. Consequently, 11 affirmative items, 9 negative items and 1 others were extracted. These items were compared their attitude toward children and attachment styles on difference. Findings indicate that the students who had a negative image toward children and formed insecure attachment style were large number on the object of the anxiety of the experience and difficult interaction between children. Accordingly, it is important that the cultivation of their affirmative attitude toward children and based on the feature of students own individual attachment style for preparation of parenting in young adults.

Key words: university students, preparation of parenting, the attitude for children,
attachment styles, the experience of contact with children

I. はじめに

近年、育児放棄や虐待など子育ての問題がマスコミに報道されない日はない。これらの問題が発生する要因のひとつには、親自身が核家族の中で育ち、自分とは異なる年齢の子どもと接した経験がなく、子どもの育ちを知らないことが考えられる。このような状況を鑑み、ここ数年前より中学生や高校生のボランティア活動と称して、学校教育の中では、保育園児や高齢者などとの交流の機会を設けているところが見受けられるようになった。また、地域貢献活動として当研究室が数年前より行っている育児相談では、現在子育てを行っている親の中には、子育てを通して親自身が子どもであった時に自分の親との間に生じた親子の問題に直面している者が少なくないことを痛感している¹⁾。親自身が子どもであった時の親子関係は、その人のその後の対人関係の基礎を成し、現在その人が他者との間に形成している対人関係はこの時の親子関係の影響を強く受けている²⁾。同様に、子育てに関してもこの時の親子関係の影響が育児の世代間連鎖として大きな影響を及ぼしている³⁻⁵⁾。このように、幼少期の人格形成やその後の対人関係の形成に重要な影響を及ぼす親子関係は、親と子の心の絆(アタッチメント)として乳幼児期に親から受ける日々の世話(ケア)の質によって決定づけられる⁶⁻⁸⁾。つまり、十分に言語を獲得していない子どもの求めに対して親が適切な対応を行ったか否かによってアタッチメントのタイプは決定される。親の関わりが適切な場合には安定型や安定型を含む混合型などのアタッチメントが形成され、そうでない場合には不安定型や回避型、またはこれらの両方の特徴が合わさった不安定回避型などが形成される⁹⁾。したがって、不幸にして良好でない親子関係の世代間連鎖により苦しんでいる人々にとっては、その連鎖を断ち切ることが必要となる。そのためのひとつの方法として、現在その人が形成している対人関係の特徴であるアタッチメントスタイルを確認し、これからの新たな親子関係や対人関係の再構築に活かしていくことが重要であると考えられる。

そこで、本研究では近い将来親になる大学生に対し、親性の準備を目的とした子ども理解や発達保障のための学習の中で保育園児とのふれあい体験の機会を設け、この体験から学生は子どもをどのような存在として認識したのかを確認し、その内容と学生のアタッチメントスタイルとの関連を明らかにすることを試みた。

II. 方法

1. 調査対象

対象は、金沢大学の教養教育の授業の中で一般に公開された開放科目である「子どもの発達とその保障」を受講している126名の学生のうち、保育園児とのふれあい体験に参加した後にレポートを提出し、さらにアタッチメントの調査を受けた81名の学生である。男子48名、女子33名で平均年齢19.2歳、所属学部は、文学系38名(46.8%)、自然科学系27名(33.8%)、医学系16名(19.4%)である。

2. 保育園児とのふれあい体験

授業の1コマを活用し、保育園児と大学生のふれあい体験のために「里山ハイキング」を行った。園児1名を2名の学生が担当することとした。この体験は、授業担当者が行っている金沢大学地域貢献活動事業「子育て支援」の協力園である金沢市内の石川県済生会保育園「アイリス」と竜樹会「竜雲寺保育園」の2つの保育園の協力により行い、参加した園児は4歳児と5歳児である。また、「里山ハイキング」は同大学理学部、中村研究室の地域貢献活動事業である「里山自然

学校」の協力により数回の打合せや下見を行い、当日のルートを決め、実施当日も研究室の協力により 90 分の授業時間内に安全に実施した。

3. 親子関係調査と学生の課題

学生に対しては子どもの頃に自分の親との間に形成したアタッチメントスタイル（以下、幼少期のアタッチメント）⁹⁾ と、それを基礎に現在他者に対して形成している対人関係（以下、成人期のアタッチメント）¹⁰⁾ を判定するために、授業開始日（平成15年10月4日）に自記式質問紙による調査を行った。親子関係やアタッチメントのタイプの特徴については講義の中で解説を行い、授業最終日に学生自身のアタッチメントスタイルの判定結果を個々に手渡し返却した。

また、学生には保育園児との里山ハイキング（平成15年11月8日）を体験した後に、体験で得たことや感じ取ったことなどについて具体的事実を述べながら課題レポートとして提出させた。

4. 分析

親子関係調査と課題レポートの結果は SPSS for Windows Ver. 12.0J 統計処理ソフトを活用し、分析を行った。課題レポートの内容は研究者間で約3ヶ月数回にわたり同じ意味を持つもののカテゴリー化を行い、数量化し、割合比較では χ^2 検定を行った。

5. 倫理的配慮

分析の対象となった学生は、講義初日に親子関係調査を受け、さらに保育園児とふれあい体験に参加した学生たちであり、アタッチメント調査への回答は学生個人の自由意思であること、回答の有無により学生は不利益を被らないことなどを伝えた。また、アタッチメントスタイルの判定結果を希望する者については記名による回答とし、個人的にその結果を返却した。

Ⅲ. 結果

1. 課題レポートから抽出された子どもとの関わりに関する項目

学生が提出したレポートから体験に基づく子どもとの関わりに関する記述のみを抽出した。子ども理解に関する学びについては、根拠となる具体的事実が記載されていないものは除外し、具体的な子どもとの関わりの場面から子どもに対する理解が深まった記載のあるものだけを取り上げ、肯定的な関わりの11項目と非定的な関わりの9項目が抽出された（表1）。関わりの項目以外では子どもとのふれあい体験前の不安感が抽出され、61.3%の学生が不安を訴えていた。以下、学生の子どもの認識に関連する要因をこれらの項目との対比から検討した。

表1 学生のレポートから抽出された子どもとの関わりに関する項目

肯定的な関わりの項目	非肯定的な関わりの項目
子どもに対する良好なイメージの変化	子どもからの働きかけなしには相互作用できなかった
子どもの特性を理解できた	他者からの働きかけなしには相互作用できなかった
自ら働きかけて相互作用できた	ほとんど相互作用できなかった
自分の過去を思い出し共感した	大人としての視点に欠けた対応をしていた
大人としての自らの在り方を考えた	子どもを見下した対応をしていた
子どもともっと関わってみたいと思った	自己中心的な関わりだった
子どもとの関わりが楽しめた	子どもへの対応が難しかった
子どもとの関わりは良い体験だった	自分に自信がないため、うまく関われなかった
子どもをありのまま受け入れた	子どもに振り回された
子どもと共感することができた	その他の項目
子どもの姿から自分の生き方を振り返った	事前の不安

2. 学生の子どもに対する認識とその関わり

1) ふれあい体験に対する事前不安と子どもの世話経験の有無

子どもとのふれあい体験前に感じた不安感を記載していた61.3%の学生の内訳を子どもの世話経験の有無でみると有意差はみられなかったが、子どもの世話経験の無い学生に事前不安の割合が高い傾向がみられた(図1)。

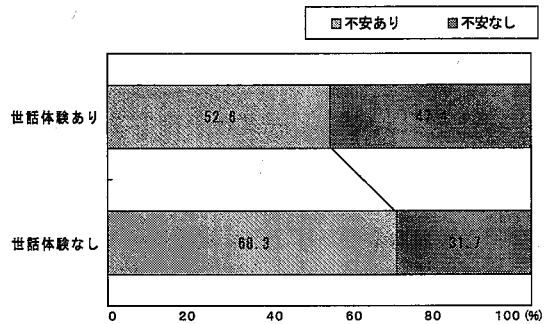


図1 ふれあい体験に対する事前不安と子どもの世話経験の有無

2) 何歳までを「子ども」と考えるかと子どもの世話経験の有無

学生が何歳までを「子ども」と考えるかについては、0～20歳までとその捉え方には幅があり平均年齢は13.5±2.7歳であった。そこで、平均年齢より0～13歳の低年齢群(平均11.6歳)と14～20歳の高年齢群(平均16.3歳)の2群に分類し、学生が過去に子どもの世話をを行った経験の有無との関係と比較したが、有意差はみられず学生が捉える子どもの年齢と世話体験の間に関連はなかった(図2)。

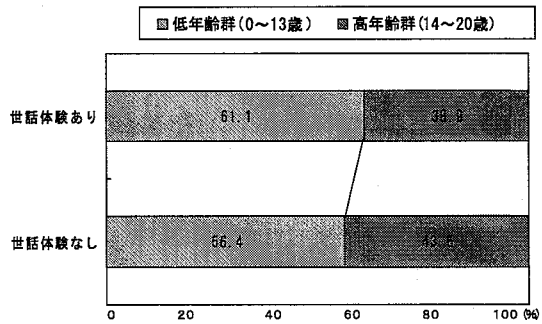


図2 何歳までを「子ども」と考えるかと子どもの世話経験の有無

3) 学生が認識する「子ども」の年齢と子どもとの相互作用

学生が里山ハイキングで子どもと接した際に相互作用できたかどうかと、学生が「子ども」ということばからイメージする子どもの年齢との比較を行なった(図3)。いずれも相互作用できたと答えている者の割合が圧倒的に高かったが、子どもの年齢を高く考えている者の中に子どもと上手く相互作用ができなかったと答えた者の割合が高かった($p < 0.05$)。

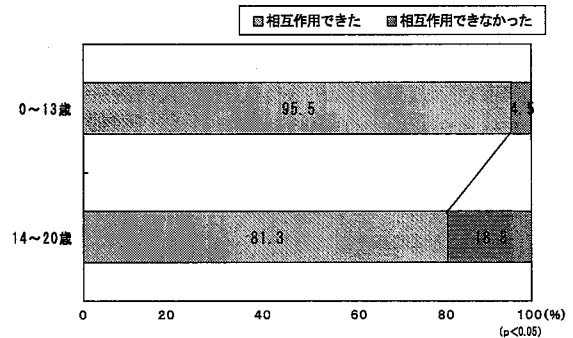


図3 何歳までを「子ども」と考えるかと子どもとの相互作用

3. 対児感情と子どもとの関わり

1) 対児感情と世話経験の有無

学生の「好き・嫌い・苦手」といった子どもに対する対児感情と世話経験の有無には有意差が見られなかった。しかし、世話経験のない者の方に子どもに対する対児感情が「嫌い、苦手」といった苦手意識の割合が高い傾向がみられた(図4)。

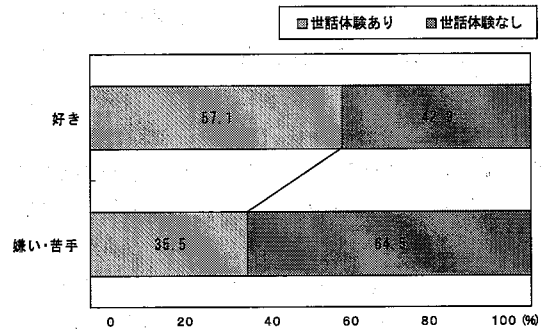


図4 子ども世話経験の有無と対児感情

2) 対児感情と子どもに対する良好なイメージの変化

学生が里山ハイキングを通して子どもとふれあった結果、子どもに対するイメージが肯定的な理解へと変化したかどうかを学生の対児感情から比較したところ有意差がみられた(図5)。子どもに対する苦手意識の強い学生の方がそうでない学生よりも子どもに対するイメージに良好な変化がみられた($p < 0.05$)。

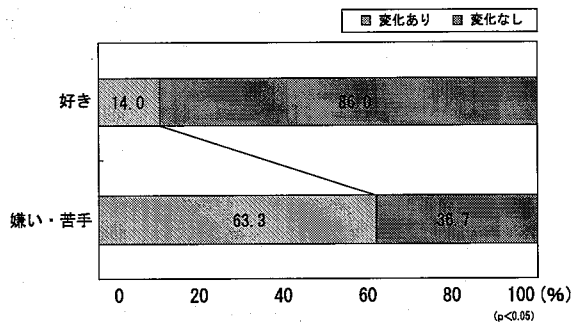


図5 対児感情と子どもに対する良好なイメージの変化

4. アタッチメントスタイルについて

学生が幼少期に両親に対して形成したアタッチメントスタイルと、それを基礎に現在他者に対して形成している成人期のアタッチメントスタイルについて6タイプの占める割合を表した(図6)。現在のアタッチメントでは男女間の顕著な相違がみられなかったため男女合わせて表した。安定型は人と関わることに大きな困難感を伴わないが、不安定型は対人関係に困難感や不安定感を強く抱く特徴を持っている。回避型は人との関係を回避したいという特徴を持ったタイプである。

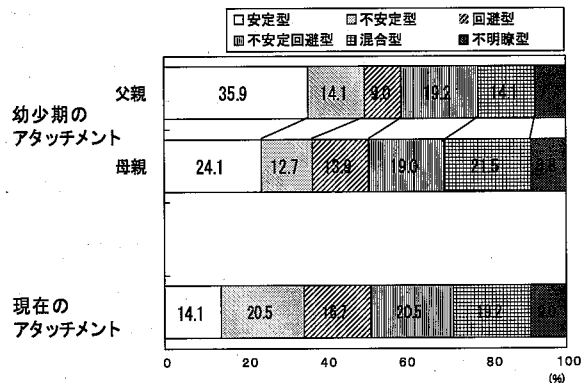


図6 アタッチメントスタイルの割合比較

これら3つの基本的なタイプに加え、不安定回避型は不安定型と回避型の両方の特徴を持っており、混合型は安定型を含む不安定型や回避型の混合した特徴を持っている。不明瞭型はいずれの特徴も顕著でないタイプである。学生が子どもの頃、自分の両親との間に形成していた幼少期のアタッチメントスタイルは、母親に対してよりも父親に対しての方が安定型の割合が高かった。しかし、安定型を含む混合型の割合と合わせると両親に対するアタッチメントスタイルの割合は約半数

が安定したタイプを形成していた。現在のアタッチメントスタイルは、幼少期の影響を受けながらも、その後の体験や経験に影響を受け、安定型やそれを含む混合型の割合は減少し、それに代わり不安定型、回避型の割合が増加するタイプの移行が生じていた。

5. 現在のアタッチメントスタイルと学生のふれあい体験による子ども観

1) 現在のアタッチメントスタイルと学生の事前不安

学生が子どもとのふれあい体験の前に抱いていた不安の有無とアタッチメントスタイルとの関係を比較すると、不安定型と回避型は事前不安の割合が最も低く、不安定回避型は最も高かった(図7)。なかでも不安定回避型と不明瞭型、混合型は「子どもの悪い面ばかりを見てしまう」といった自分自身の特徴に起因することで生じる不安が高かった。

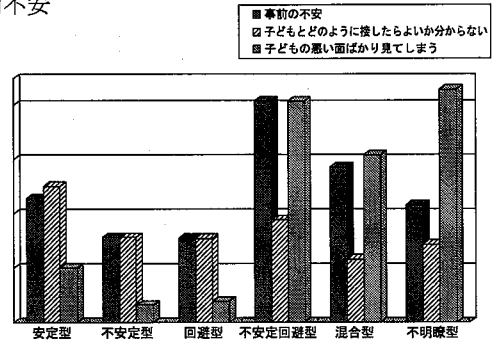


図7 体験前の学生の事前不安と現在のアタッチメントスタイル

2) 現在のアタッチメントスタイルとふれあい体験における子どもとの関わり

子どもとのふれあい体験に基づく学生のレポートを分析し、肯定的な関わりとの11項目と非肯定的な関わりとの9項目について学生のアタッチメントスタイルとの関連から比較した。「事前の不安」に関しては、否定とも肯定とも判断することができないためその他の項目として扱ったが、他の項目との比較のために両方の図に示した。

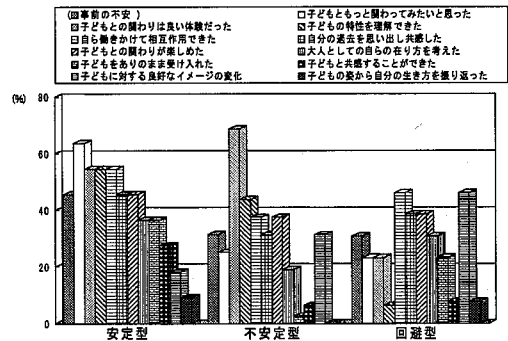


図8 体験による子どもへの肯定的関わりと現在のアタッチメントスタイル(1)

(1) 現在のアタッチメントスタイルと肯定的な関わり (図8、9)

安定型ではふれあい体験後も「子どもと関わってみたいと思った」との項目が最も高くなっていたが、それ以外の項目も他のタイプと比較すると高い割合を示しており、安定型の学生は子どもとの交流を楽しんだ様子がうかがえた。不安定型は「子どもとの関わりは良い体験であった」と答えた割合が圧倒的に高くなっていたが、一方で「子どもをありのまま受け入れた」と答えた割合は最も低く、ふれあい体

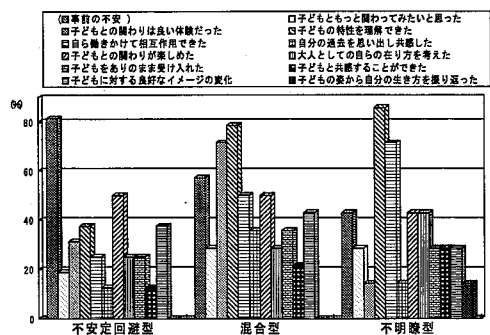


図9 体験による子どもへの肯定的関わりと現在のアタッチメントスタイル(2)

験は学生にとって子どもを知る機会になったことがうかがえた。回避型は「子どもに対する良好なイメージの変化」が他のタイプに比べて最も高い割合を示していた。しかし、「子どもの特性を理解できた」の項目は他のタイプに比べて最も低い割合を示し、事前の不安も少なく子どもとの関係が深まったとの印象は弱かった。不安定回避型は「事前の不安」が圧倒的に高く、それ以外の項目は他のタイプに比べて全体的に低い割合を示していた。このことから子どもとの交流は緊張した関係であったことがうかがえた。混合型は他のタイプに比べて「子どもの特性を理解できた」と「子どもとの関わりは良い体験だった」と回答した割合が最も高くなっていった。しかし、「子どもともっと関わってみたいと思った」との回答は安定型に比べて半数以下であり、子どもに対する姿勢は安定型に比べてやや距離を置いた関係であったことがうかがえた。不明瞭型は他のタイプに比べて「子どもの特性を理解できた」の項目が圧倒的に高く、次いで「自ら働きかけて相互作用できた」と答えた割合が高かった。しかし、「子どもとの関わりは良い体験であった」と答えた割合は他のタイプに比べて最も低かった。また、「子どもの姿から自分の生き方を振り返った」との回答はこのタイプだけにみられ、タイプの特徴が明らかでないこのタイプの者は子どもとの交流から多くの刺激を受けたことが示唆された。以上のことから、現在のアタッチメントスタイルにより学生の子ども理解には大きな相違がみられた。

(2) 現在のアタッチメントスタイルと非肯定的な関わり (図 10.11)

安定型と不明瞭型は「子どもからの働きかけなしには相互作用できなかった」と答えた割合だけが高く、それ以外の項目に占める割合は低かった。不安定型と不安定回避型は他のタイプに比べて「子どもへの対応が難しかった」「ほとんど相互作用できなかった」と答えた者の割合が高く、子どもとの交流がスムーズに行われなかったことがうかがえた。回避型は「子どもからの働きかけなしには相互作用できなかった」と「子どもに振り回された」の回答が高く、関わりは子どもから一方的に行われていたことがうかがえた。不安定回避型は他のタイプに比べて「子どもへの対応が難しかった」、「自己中心的な関わりだった」、「自分に自信がなく関われなかった」、「ほとんど相互作用できなかった」、および「子どもを見下した対応をした」など多くの項目で高い割合を示し、子どもとの交流の困難さがうかがえた。混合型は「子どもに振り回さ

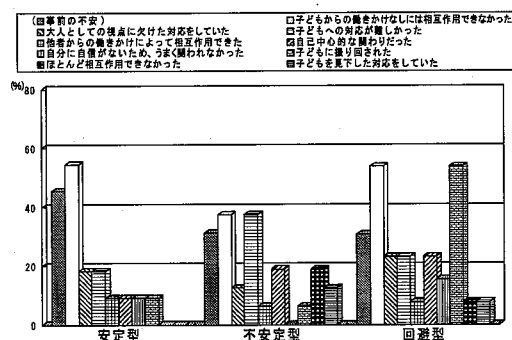


図 10 体験による子どもへの非肯定的関わりと現在のアタッチメントスタイル(1)

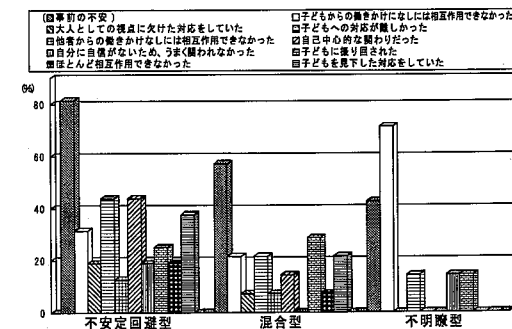


図 11 体験による子どもへの非肯定的関わりと現在のアタッチメントスタイル(2)

れた」との回答が多かった。したがって、非肯定的な関わりにおいてもアタッチメントスタイルのタイプにより子どもへの関わりは異なっていた。

IV. 考察

学生の生育暦の中において、子どもとの世話体験や遊びの機会を通して子どもと関わった経験のある者は45%であり、子どもを知らない学生が半数以上いることがうかがえた。したがって、子どもに好感情を抱いている者が高い割合であっても「可愛いから」といった子どもの行動や外見上の印象に強く影響を受けた程度の認識であることがうかがえた。このような、子どもを知らない学生が漠然と考える子どもの年齢は、平均13才であり、概ね小学校を卒業し中学に入るまでをひとつの区切りと考えていた。これを親の調査¹⁾と比較するとややその年齢は低い傾向がみられた。また、年齢を低く考えている者の方が子どもとの相互作用は容易であった。

学生にとって、子どもとの里山ハイキング前の緊張感是非常に強く、多くの学生が「事前の不安」を訴えていた。そのため、里山ハイキングに際して、受け持ちの子どもを紹介されても学生は直立不動で対応し、子どもに声をかけることも、学生の方から手をつなぐこともできず、子どもの方から差し伸べられた手を握り返すことが精一杯の状態ですり山ハイキングが開始された。初めのうちは双方共に会話をするのも困難な様子で、学生も子どもも黙ったまま子どもは両方の手を2人の学生に牽引されるような状態で黙々と山道を登る組、子どもに対して「何か話してもいいんだよ」といった奇妙な声かけで子どもに救いを求める学生、あるいは指導者の援助や受け持った子どもの快活さに助けられながら子どもと関わりはじめる者などさまざまであった。しかし、その後徐々に両者の緊張感はほぐれ、子どもの手の小ささに驚きと感動を覚える学生や、子どものエネルギーに圧倒され、息も切れ切れに子どものあとからついていく体力のない学生、子どもと同じ目の高さで物を見、話をする学生などさまざまな関わりの様子がみられた。このように、学生が様々な子どもとの関わりに変化を示す中で、学生が過去に子どもとふれあった経験の有無と事前不安との間には関連はみられなかった。むしろ学生の事前不安はアタッチメントスタイルとの関連が強いことが明らかとなった。

今回の調査では、子どもに対する苦手意識の強い学生が少なかったためか、対児感情と子どもへの関わりでは、子どもと関わった経験の少ない学生の方が子どもに対する苦手意識が強いとの結論は導かれなかった。しかし先行研究¹¹⁻¹²⁾によれば、体験の有無と対児感情の間には明らかな関連が確認されている。また、子どもとの関わりを経験していない苦手意識の強い学生は、体験レポートの中で「子どもはうるさい」、「予測できない突発的な行動を取る」、「何を考えているかわからない存在」と子どもを表現していた。しかし、このような学生ほど子どもとの交流を通して「自分の子どもの頃を思い出した」、「思っていたよりしっかりしていた」、「子どもとの会話が満足にできない自分に焦りを感じた」、「子どもを見下した対応をしてしまい、最後まで打ち解けてくれなかった」などといったように、体験以前に子どもに対して抱いていた思いは子どもとの関わり後に修正され、子どもに対するイメージの変化が大きく見られた。また、このような学生は子どもと良好な関係を形成するのに他者の仲介を必要とし、そのことによってようやく子どもとの関係を形成することができた者たちであった。したがって、子どもを知らないことから苦手意識を抱いている学生に対しては、子どもとの関わりが成立するような関係の取り方へと導く介入が必要であり、このような介入は親に対する子育て支援の際も同様であると考えられる。

現在、他者に対して形成しているアタッチメントスタイルの割合は、子どもの頃両親に対して

抱いていた安定傾向の割合が減少し、不安定型や回避型の割合が増加するタイプの移行が生じていた。このようなタイプの移行¹²⁻¹⁴⁾を子育て中の親の場合¹⁵⁾と比較すると、安定傾向の割合の減少の方が著しかった。このことは学生がこれまでに育てられた親の価値観から離れ、自分なりのアイデンティティを再構築する時期にある青年期特有の特徴と考えられ、子育て中の親との大きな相違点であった。

また、6タイプのアタッチメントスタイル²⁾から子どもに対する考え方や対処の方法である学生の子ども観を比較すると、非安定傾向のひとつのタイプである回避型は、他者との関係を回避する傾向が強いため、子どもに対する関心も低く事前の不安は最も低くなっていた。しかし、子どもとの関わりを体験したことによって子どもに対するイメージは著しく変化し、子どもの理解が深まった。不安定回避型は子どもの悪い面に注目する傾向が強く、ふれあい体験に対する事前の不安が最も強かったが、自分自身が子どもとうまく関わることができるかどうかといった学生自身の課題に直面したため、最終的には子どもとのふれあい体験が学生自身の姿を見つめ直す機会になっていることが考えられた。したがって、対人関係を取るのが苦手な学生にとって子どもとのふれあい体験は相手を知り、自分を見つめ直す良い機会であったといえる。

アタッチメントスタイルと子どもとの関わりについては、安定型は肯定的な関わりの項目の多くに高い回答をしており、今後も子どもとの交流の機会を望んでいた。このように対人関係の形成が容易な安定型や混合型は他者を受け入れ、人との交流を楽しむことのできるタイプであった。不安定型は、子どもとの関わりを良い体験であったと答えた者が多かったが、子どものあるがままを受け入れることは困難で、スムーズな関わりができず、子どもへの対応を難しいと感じている者が多かった。したがって、不安定型の学生にとっては今回の体験は達成感が深まるものではなかったものと思われる。回避型は子どもも主導の関わりであったが、そのことによって学生が子どもの特性を理解するきっかけとなり、他のタイプに比べて子どもに対する最も大きなイメージの変化が生じていた。人との関係を回避しがちな回避型の学生はこのような体験を通してその傾向が少しでも改善されれば今後の対人関係に広がりが生じ、将来の子育てに対する障害も少なくなるものと思われる。不安定回避型は子どもとのふれあいに対する事前の不安が最も強かったが、交流後には「子どもとの関わりは良い体験であった」と答えていた。しかし、このタイプの学生は「自分に自信がなくなうまく関われなかった」、「子どもが自分に～をしてくれたので嬉しかった」といったように、相手との関係を自分中心にしか考えられない傾向の者が多く、また「子どもを見下したような見方や対応」を行っており、今後もさまざまな対人関係の問題を引き起こす可能性を含んでいるものと考えられる。不明瞭型は「子どもとの関わりは良い体験であった」と答えている割合は低かったが、唯一「子どもの姿から自分自身の生き方を振り返った」と回答したタイプであり、「子どもの悪い面ばかり見てしまう」と回答しつつも子どもに対する学生の理解や子ども観は大変深まったものと考えられる。

非安定傾向のアタッチメントスタイルである不安定型、回避型、不安定回避型にみられる共通の問題としては、子どもと共感し合うことが非常に少ないことであった。人と人との関係は相互作用により成立するものであり、学生の子どもとの関わりは受け持った子どもの特性や学生の過去の体験によっても影響を受けるものであるが、子ども理解や子どもへの関わりは学生のアタッチメントスタイルによって大きく異なっていた。

子どもの育ちを知らない親による様々な事件が発生する中で、近い将来親になる学生に対して子どもとの関わりや子ども理解のための機会を保障することは重要であり、加えて、近年、

自分自身の対人関係に苦しむ学生も多く、このような学生にとって自分自身のアタッチメントスタイルを知ることは自身の親子関係を見つめ直し人との新たな関係を再構築する上で重要であり、また学生の親性の準備にとっても重要なことである。子どもとのふれあいはこのような機会を学生に準備するひとつのきっかけとして非常に有効であると考えられる。

謝 辞

里山ハイキングにご協力頂いた石川県済生会保育園アイリスと龍雲寺保育園の園児、並びに園長先生を始め職員の皆様方、そして本学理学部の中村浩二教授と研究室の皆様に深謝申し上げます。

文 献

- 1) 木村留美子：子どもって・・・ 前田書店，2003.
- 2) Rumiko kimura, Akiko Tsuda, Kimiyo Nanke, Aya Kimura : The study of the attachment style of the mother — Six types — . 金沢大学医学部保健学科つるま保健学会誌、第27巻、81-85,2003.
- 3) 遠藤利彦：内的作業モデルと愛着の世代間伝達. 東京大学教育学部紀要, 32 : 203-220, 1992
- 4) 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹：日本人母子における愛着の世代間伝達. 教育心理学研究, 48(3): 323-332, 2000.
- 5) 山崖俊子：ある母子生活支援施設における子どもの虐待の実態と母親自身の被虐待体験. 小児の精神と神経, 42(4)、273-281、2002.
- 6) Bowlby, J. : Attachment and Loss (I), 1969. (黒田実郎訳：母子関係の理論 I , 愛着行動. 岩崎学術出版社, 1976.)
- 7) Bowlby, J. : Attachment and Loss (II), 1973. (黒田実郎訳：母子関係の理論 II , 分離不安. 岩崎学術出版社, 1977.)
- 8) Bowlby, J. : Attachment and Loss (III), 1980. (黒田実郎訳：母子関係の理論 III , 愛情喪失. 岩崎学術出版社, 1981.)
- 9) 青柳肇・酒井厚：アダルト・アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係. 早稲田大学人間科学研究, 10(1): 7-16, 1997.
- 10) 詫摩武俊・戸田弘二：愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—. 東京都立大学人文学報, 196 : 1-16, 1988.
- 11) 木村留美子：子ども観の研究(1)— SD 法による短期大学生の子どものイメージについて—. 日本看護学会誌, 12(1):50-56, 1992.
- 12) 河田史宝：幼少期の Attachment から Internal Working Models へのタイプの移行とこれに影響を及ぼす要因—大学生男女において—, 金沢大学大学院医学系研究科修士論文, 2002.
- 13) Bretherton, I.: Communication Patterns, Internal Working Models, and the Intergenerational Transmission of Attachment Relationships. *Infant Mental Health Journal*, 11(3):237-252, 1990.
- 14) 山岸明子：青年後期から成人期初期の内的作業モデル：縦断的研究. 発達心理学研究, 8(3): 206-217, 1997.
- 15) 南家貴美代：母親の幼少期の Attachment から Internal Working Models への移行と育児観, 金沢大学大学院医学系研究科修士論文, 2002